

博士論文審査および最終試験結果報告書

申請者 人間文化学 研究科 地域文化学 専攻

学籍番号 1376002

氏 名 久保 奈緒子

論文題目

に關する  
三階蔵の基礎的研究

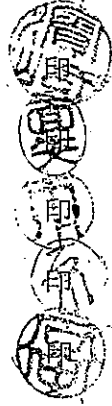
1. 博士論文審査および最終試験結果

A. 合格                      B. 不合格

公立大学法人滋賀県立大学学位規程第11条に基づき、以上のとおり報告いたします。

平成31年2月25日

人間文化学研究科長 様

|             |                         |                     |   |
|-------------|-------------------------|---------------------|---|
| 博士論文審査委員会主査 | 職 名<br><u>教授</u>        | 氏 名<br><u>濱崎 一志</u> |  |
| 副査          | <u>教授</u>               | <u>面矢 慎介</u>        |   |
| 副査          | <u>教授</u>               | <u>市川 秀之</u>        |   |
| 副査          | <u>准教授</u>              | <u>石川 慎治</u>        |   |
| 副査          | <u>武庫川女子大学<br/>客員教授</u> | <u>石田 潤一郎</u>       |   |
| 副査          | _____                   | _____               | 印   |

## 博士論文審査結果の概要

|  |       |    |    |       |
|--|-------|----|----|-------|
| 申請者氏名  | 久保奈緒子 |    |    |       |
| 審査委員会主査  | 職名    | 教授 | 氏名 | 濱崎 一志 |
| 論文題目   |       |    |    |       |
| 三階蔵に関する基礎的研究   |       |    |    |       |
| 論文の内容の要旨   |       |    |    |       |
| <p>本論文は、江戸時代初期から大正時代末までに建てられた土蔵造り3階建ての蔵(以下、三階蔵と表記する)に関するものである。日本における木造3階建ての建物は江戸時代初期には角地に象徴的に建てられていた例もあるが、その後の家作制限により禁じられてきた。しかし、こうした禁令をかいくぐり、貞享5(1688)年に刊行された井原西鶴の『日本永代蔵』の「一に依、二階造り、三階蔵を見渡せば、都に大黒屋といへる分限者有りける。」の記述のように三階蔵は富の象徴として、敷地の奥など人目に触れにくいところに建てられていたというのが、これまでの共通認識であった。</p> <p>本研究は、現存する三階蔵の広範な調査を通して、三階蔵の構造や意匠、使用目的、建築年代、建築の背景などを考察し、その特質を明らかにすることを目的としたものである。</p> <p>本研究の特徴的な点は、これまでの三階蔵の研究が町触などの文献資料や、『江戸図屏風』や『洛中洛外図屏風』などの絵画資料を中心に進められてきたのに対し、現存する三階蔵の広範な現地調査を通して、三階蔵の特質を考察してきた点にある。</p> <p>これまで蔵の建築史的な編年研究はほとんどおこなわれていなかった。大半の蔵が単室であり平面形が単純であるため、平面形から蔵の編年を追うことは困難であり、また、温湿度の変化の少ない土蔵の内部では用材が劣化しにくく、用材の風化具合などによる建築年代の推定も困難なことから、体系的な蔵の編年研究はおこなわれてこなかった。こうした中で、本論文は建築年代が判明している三階蔵の開口部や独立柱のあり方などの細部の観察を通して、編年の手がかりを得ようと試みたものでもある。</p> <p>具体的には、文化財データベースや建造物の調査報告書などをもとに三階蔵のデータベースを作成し、大正時代までに建てられた木造の三階蔵で現存するもの75棟を抽出し、研究の対象としている。三階蔵の大半は個人所有であり、調査の許可が取れないものもあったが、34棟の三階蔵について、実測調査や詳細な観察をおこなう機会を得た。このデータをもとに三階蔵の平面規模、階高、出入り口の仕様、階段の位置、小屋組、床組み、独立柱の有無などについて精査し、こうした要素とその地域性や年代観について考察している。こうした考察を通して、以下のような成果を上げることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・精査した34棟の中で、3棟の三階蔵において3階部分を増築した痕跡を見つけた。2階</li> </ul> |       |    |    |       |

建ての蔵の小屋組を取り払い、3階部分を増築していた。増築時期の特定はできなかったが、利用効率の悪い三階蔵をあえて建てる意味や、独立柱が三階の床を支えるにとどまり、三階部分に継ぎ足されていないことなどから、小屋組の構造的な発達について貴重な資料となった。

・これまで三階蔵の3階には座敷が設けられ、使用目的が蔵座敷であるかのように認識されていたが、今回の調査で当初から座敷を設けていた例は1例もなく、少なくとも絵画資料に表されている江戸時代初期を除いて蔵座敷としての利用はなかったことを明らかにした。3階部分の階高もかなり低い例が多く、このことを裏付けた。

・聞き取り調査の中で救済蔵が2棟現存していることが判明した。救済蔵はお助け蔵とも呼ばれ、飢饉の際の農民の救済目的で建築したもので、富の象徴であるとともに、状況によっては三階建てが認められることを明らかにした。

・実測調査を進める中で2棟の三階蔵が四方転びで建てられていることを確認した。四方転びは鐘楼や櫓、山車などを建てる時、四隅の柱を内傾させるもので、水平方向からの力に耐えるためのものと考えられている。

・防火機能を要求される蔵の窓には、土戸が取り付けられるが、34棟の内9棟で内開きの扉を確認した。狭い蔵の中に内開きの扉を付けることは空間の利用効率上好ましくはないが、長い壺金具を必要とする外開きの扉を嫌ったもので、古い蔵の特徴であることがわかった。

・三階蔵を中心に現在の維持管理や活用の状況についてまとめ、持続可能な保存・活用のあり方について事例をあげて考察した。

#### 審査結果の要旨

本論文は全国各地に残る三階蔵を事情が許す限り実測調査をおこない、丹念に細部を観察し、これまで体系的に取り上げられていなかった三階蔵の特質を明らかにしたものである。

数の多さと構成の単純さから体系的な研究が進んでいない2階建ての土蔵の研究との比較検討にやや甘いところがあるものの、三階蔵を広範にわたり調査し、まとめ上げたものであり、また、三階蔵に限らず、土蔵の変遷を細部から考察する上で貴重なものであり、博士論文審査委員会(濱崎一志、面矢慎介、市川秀之、石川慎治、石田潤一郎)は、本論文を滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科博士(学術)学位に相応しいと判断した。